

私の幼児育論(一)

——依存と自律——

佐々木 正美

私自身、三人の子どもの父親であり、しかも最初の子どもが昨年の春小学校に入学したばかりである上に、わが家にはほかに二人の幼児がいる。

また私は、児童期から思春期にかけての精神医学を専攻する医者として、毎週七〇人前後の子どもとその家族の人たちに病院や診療所の外来や病棟で会う。そのうちの過半数は幼児であり、みんなそれぞれに、さまざまな形で心を病んでいる。医者としても父親としても、幼児の教育には強い関心をもたざるを得ない。

人間は「生理学的に未熟な状態」で産まれてくる。そのために無力で他に完全に依存した状態で生活を始めることになる。ということは、それだけ教育の可能性が大きいということになる。人間ほど教育の影響を受ける生命体は他にない。

新生児期から最初の一年間の乳児期は、子どもの依存要求が最も旺盛な時期である。そして、この時期の過ごしかたが、その後の幼児期はもとより、さらにその後の学童期や思春期に至る成長や発達のプロセスと内容に決定的に重要な意味をもつ。

乳児期から幼児期のはじめにかけての子どもは、自分のあらゆる欲求を満たすために母親の助けを必要とする。空腹、喉の渇き、寒さ、暑さ、孤独、不安などの苦痛を、どれひとつとして自分で解決できない。したがって、この時期の子どもに接する母親やその他の保育者の態度は、子どもの世界を、欲求の満たされる心地よい安全な場所にするともあれば、それとは逆に、泣いて訴えても欲求が聞き入れられず、不快で不安なところという潜在的な認識でいっぱいにしてしまうこともある。

生後、最初の一年間に形成される周囲への信頼感は、自己への

信頼すなわち自信の形成に不可欠な発達心理的な要素であり、この最初の時期を、他人や周囲を信頼することができないまま経過してしまつと、環境に対する不安や不信感とともに、自信のなさや無力感を育ててしまつて、その後の人格形成に訂正の困難な影響を残すことになる。

そのために、この時期の養育の課題は、子どもの欲求を的確に知ることである。赤ん坊の泣き声の意味を正しく理解しなければならぬ。その欲求を、できるだけすみやかに、そのまま満たしてやることである。

母性の豊かな有能な母親とは、子どもの泣き声などの欲求表現に敏感に正しく反応し、ミルク、濡れたおむつの交換、話しかけ、抱っこなどの欲求が満たされて、不安のない心地よさそうな表情や仕草を見せる子どもに接することで、激しい喜びを感じられる人のことであろう。

母性とは本能ではなくて学習の結果だといわれる。しかも育児における母性行動は、子どもの欲求表現によって誘発される要素が大きく、健全な母子関係は母と子がそれぞれに、心身ともに健康でなければ成立しにくい。

最近の若い母親に会っていると、子どもの欲求に鈍感であったり無関心であったりする人が、意外に多いという気がする。育児

以外のことに気持ちが行きすぎている。子どもが母親に対して全面的に依存した生きかたをしなければならぬ時期に、母親が母親以外の生活に気持ちを奪われすぎている。母親以外の生活がありすぎるといふよりも、母性を学習しそこなつてきたと思える場合が多い。

人間の胎児が四〇週間も胎内にいるということの意味は重要である。長い期間にわたつて、母親は胎動などに感じられる子どもの子宮内の発育をいとおしく思いながら、出産とその後の母親になるための心の準備をしていく。生まれてくる子どものために、手造りの肌着などを用意することは、母親に母性を育てるという意味では、極めて重要なことだと思ふ。デパートのベビー用品コーナーで、何でもインスタントに揃つてしまふことも、母親になるための心の準備を阻害してはいないかと心配に思ふ。また夫婦間のさ細なトラブルに、気をとられて、容易に母性を見失つてしまふ母親も多い。

私は自分の妻の妊娠中、家庭での雑談におりにふれて胎内の子どものことを話題にとり上げた。冬に生まれてくる予定の子どものことは、手編みのソックスや手袋やケープをつくつてみることもすすめてみた。東京のある日赤病院で、三人とも生まれたが、出産準備のための妊婦教室には、それぞれの妊娠中、休まず通ふこと

をすすめた。とくに長男と次男は一年四ヶ月しかちがわないう年子であったが、二年続けて同じ教室に同じような話を聞きに行くことを妻にすすめた。やがて生まれてくるそれぞれの子どものために、母親としてその都度の心の準備が必要だと思ったからである。講義中に病院長は、見おぼえのある妻に気づいて、私たちの意図に感動的に賛意を表してくれたという。

生まれてきた子どもに対して、私たちは、最初の約一年の間は、子どもの欲求表現をできるだけ素早く理解して、そのとおり満たしてやるように全面的に心掛けた。深夜の授乳やオムツの交換、昼間の話しかけ、抱っこ、散歩など、子どもたちの要求に面倒がらずにどんどん応じてやった。いわゆる抱きぐせも大いにつけた。抱きぐせをつけると、将来依頼心の強い子どもになるというような短絡的な考えかたは、私は信じていない。むしろ逆である。早期に充分に依存的な欲求を満たしてやるのが、早い時期の自立や自律につながることを、私は多くの事例で学んでいる。周囲の人に対する基本的な信頼感を身につけることなしに、その後の自律感や自立心を獲得できるはずはないと思う。

子どもはその後の成長や発達の過程で、自分でできることが多くなってくる。それと同時に、母親やその他の養育者から、成長

や発達のために必要な行動の切りかえを要求される。

母親の乳房から直接授乳されたり、哺乳びんから飲んでいても、コップからミルクやフルーツジュースを飲むように教えられ強いられる。

やがて離乳がはじまり、スプーンで食物を与えられ、次いで自分でスプーンを持って食べることを期待され、箸を用いることも習わなければならなくなる。

母親やその他の人への依存をだんだん減らされ、自分のことは自分ですることを多く期待されるようになる。それまでの全面的な依存的な生活の内容が、母親たちによって少しずつ阻止されていくのだが、この依存から自律への過程は、それまでの甘えや依存の欲求が十分に満たされていなければならないほどスムーズにいく。自律をうながすために、子どもの甘えや欲求を制限しようとする人たちへの、基本的な（あるいは潜在的な）信頼感が培われているからである。

毎週病院や相談所で大勢の親子に会っていて、特に印象的に思うことは、最近の親は子どもに対して保護をし過ぎる上に、干渉をし過ぎている。

おそらく育児に関する情報がありすぎて、過剰な情報に振りまわされたり、その中で混乱したりしているのだろう。それと同時

に、母親に時間的・経済的ゆとりがあることも、時として災いになっている。さまざまな育児や幼児教育に関する情報の洪水の中で、ともすると知識的・観念的育児になりやすい側面と、経済的余裕からくる過保護、時間的余裕もたらす干渉などの育児に関する傾向が、現代っ子の情緒的・精神的発達を阻害する要因になっていることは否定できない。

私は子どもが一歳半になる頃から、すなわち依存的状态から最初の自律感を獲得する過程で、徐々にしつけに関する親の態度を明らかにしていく。そしてその際に最も留意することは、子どもに対する保護と干渉が過剰にならないようにすることである。

過保護や過度の依存状態にいつまでも子どもをおいておくことは、幼児の心に自主的で意欲的な態度を育ててこなることになる。幼児期の後期から学童期に至っても、幼稚で非現実的な期待を持ち続けるために、周囲がそれに対応できなくなると、容易に慢性の欲求不満に陥る。そして、すねたり、ひがんだり、夜尿や指しゃぶりを繰り返したりして、情緒的に不安定な状態を続ける。

また一方、子どもの行動に対して過度に干渉したり、過剰の期待をすることも、自主性や自律感を育ててこなることになるので、私自身特に注意している。

しつけとは、社会的に認められる行動を教えることだが、そのことを子ども自身が発達の時期に合わせて理解できるように導きたいと思う。だから、しつけをされている過程で、子ども自身が社会的に承認される行動を発見していくことができるような育て方をしたいと思いつけている。この課題に、子ども自身が意欲的にとり組めるようになった時、はじめて子どもに自律性を育てることができると思うし、創造力への基礎を培うことにもなるのだと思う。

そのことは同時に、親の側からすると、子どもを望ましい人間に育てようとする働きかけであるが、そうだとすると、親のほうであらかじめ「望ましい人間像」に関する価値観をもっていなければならぬ。それがないと、その場その時で利他的で衝動的な干渉することになって、子どもに自主的な自律行動をとれなくしてしまい、潜在的な無力感や自信のなさを植えつけてしまいか、周囲に対する不信から、むやみや攻撃的な人格の芽をつくりあげてしまうことになる。

しつけをする場合に心掛けることは、どのような方法で子どもをしつけるかという技術的なことではなくて、明確な価値観や人間観に基づいて、どういうことを目標に育児をするかという基本的な姿勢をもっていることだと思っている。親がこういう基本姿

勢を欠いたまま、子どもの行動を規制したり、生活に干渉したりすることが、どんなに子どもを混乱させているかという実例は、病院や子ども相談室の窓口の数多くみることができる。

親の一貫性を欠いた強制や禁止などの要求が、衝動的・感情的に行なわれすぎると、子どもは自律的な主体感を育て得ないまま、怒りや攻撃的な感情を内在させ、意味のない反対や協調性のない行動が多くなって、家庭内ではもとより、保育集団の中など日常生活の種々の場面で不適応行動を起こしやすくなる。

ところが一方、怒りの感情を表現することも、反抗的な行動をとることも許されないほど完全に、強制的なしつけをされてしまっている場合もある。このように見事に極端なしつけが行なわれていると、子どもは表面的には非のうちどころがないように見えて、素直で礼儀正しい行動をとることができるが、親の顔や周囲の人の期待にばかり気を奪われて、自主的で創造的な行動がとれなくなる。

その結果、そういう子どもは、一見矛盾するような事柄について二者択一の判断をせまられるような場面では、強い不安に陥って不適応な状態を示すことになる。家庭内では、一応安定した行動がとれていたのに、保育園や幼稚園の子ども集団に入ったときに、自主的な言動がとれなくなって、頑固なかん黙や通園不能

な状態に陥ってしまうような場合は、その典型ともいえよう。

私が心掛けたい幼児期のしつけは、なんといっても子どもの発達や適応能力を注意深く見つめながら、子どもが新たな課題を与えられた時、かりに当初のうちは抵抗や拒否を示すようなことがあっても、結局は自ら意欲や誇りをもって行動できるように課題を与えて、無理な強制や服従を性急に強いることを避けて、子どもが新しい適応行動を学んで行く過程を、私自身が楽しみながら忍耐強く見守りたいと思うのである。この際、子どもがしつけと呼ばれる新たな課題の習得に、誇りと意欲をもってとり組めるように導くことに、私は最大の関心をはらいたいと思っている。

幼児期の育児に関して、そのかけがえのないはずの重要性が、時として意外なほど忘れられているのが「遊び」と「父親」の問題である。

次回はこの二つのテーマを中心に、私自身の幼児教育を考えてみたい。

(つづく)

(神奈川県・小児療育相談センター)
東京女子医科大学小児科